川崎医療福祉学会誌　Vol. 29　No. 1　2019　231－237

症例報告/事例報告

星野仙一氏（元日本プロ野球選手・監督）の肢体不自由児との交流
―肢体不自由児への態度と交流への意欲―

髙尾堅司[*1]　水子学[*1]　佐々木新[*1]　山村健[*2]

要　　約

本研究の目的は，元日本プロ野球選手・監督の星野仙一氏（1947-2018）の肢体不自由児に対する態度と交流への意欲について定性的に分析することであった．分析対象は，「星野」「ティーボール」などの単語を含む記事であった．その記事は，社会福祉法人旭川荘が発行した広報誌から抽出された．分析の結果，星野氏と肢体不自由児間で相互に激励し合う関係性が存在していたことが確認された．さらに，肢体不自由児は星野氏が紹介したティーボールに取り組んだことによって，人への思いやりや協調性を学ぶ機会を得たことが分かった．以上の結果は，肢体不自由児が星野氏との交流によって，社会参加の機会を得ただけではなく，自主的に取り組む機会を得たことを示唆している．

1．緒言

人との交流は，ときに人生における転機になることがある．とりわけ，子どもにとって人々との交流は心理的成長[†1)]をもたらす機会となり，その後の人生を左右する可能性がある．自ら交流の機会を得るには積極的に外出することが有効だが，日常生活動作が困難な状態にある肢体不自由児のなかには，外出を躊躇する者がいる．肢体不自由とは，文部科学省初等中等教育局特別支援教育課[1)]によると「肢体不自由とは，身体の動きに関する器官が，病気やけがで損なわれ，歩行や筆記などの日常生活動作が困難な状態」とされている．日常生活動作の困難さは，ともすれば外出を躊躇することにつながる可能性がある．仁宮ら[2)]は，肢体不自由児施設に5年以上入所する者を対象に，自身の障がいに対する思いや施設での生活において抱いた気持ちについて調査を実施した．その結果，「健常児と自己を比較しての葛藤体験」「障害児と自己の照らし合わせ」「障害児同士でいることの安心感」「装具に対するプラスイメージの獲得」「外出することに対する葛藤体験」「自分の中に閉じこもりたい思い」「『自分をみてほしい』という思い」「障害があるという実感」「自己肯定感の獲得」「完治しない障害へのあきらめ感」「障害を克服するための努力」という計11カテゴリーが確認された．仁宮ら[2)]の結果は，肢体不自由児が施設内の人々との関わりを中心に暮らすなかで一種の安心感を覚える一方で，施設外の世界と接点を持つことに戸惑いを覚えていることを示唆している．このような肢体不自由児にとって，施設外の人々との交流をいかにして確保するかは，肢体不自由児の心理的成長を促進するための課題のひとつである．

しかし，肢体不自由児が施設関係者以外の人々と交流しさえすれば心理的成長が促進されるとは限らない．交流の過程で，肢体不自由児がどのような経験を積むかが，肢体不自由児の心理的成長に影響を及ぼすのではなかろうか．たとえば，肢体不自由児に愛情を注いでくれる人との出会いや，ともに活動に関わる過程で喜びを他者と分かち合えたならば，肢体不自由児の心理的成長により一層肯定的な影響を及ぼすのではなかろうか．その事例のひとつとして考えられるのが，社会福祉法人旭川荘の旭川療育園（岡山県岡山市）の肢体不自由児と元プロ野球選手・監督の星野仙一氏（1947-2018）との交流である．

1947年に岡山県倉敷市に生まれた星野仙一氏（以下，星野氏と称す）は，岡山県立倉敷商業高等学校，明治大学へと進み，1969年に中日ドラゴンズに

*1 川崎医療福祉大学　医療福祉学部　臨床心理学科
*2 川崎医療福祉大学大学院　医療福祉学研究科　臨床心理学専攻
（連絡先）髙尾堅司　〒701-0193　倉敷市松島288　川崎医療福祉大学
E-mail : takao@mw.kawasaki-m.ac.jp

入団した[3]．1982年に引退した2年後の1984年から，およそ30年にわたって毎年旭川荘を訪問した[4]．30年に及ぶ訪問歴において，星野氏は旭川療育園の肢体不自由児にティーボールを紹介した．ティーボールとは，野球の要素を取り入れたものであるが，投手は不在で本塁後方のバッティングティーに載せたボールを打者が打つ点が野球とは異なっている[5]．1993年に発足した日本ティーボール協会は，小学生のみならず女性や中高年，さらに障がいのある人々をも対象としたボールやバットを作り，さらに新たなルールを作成した[5]．ティーボールは，用具も柔らかく安全性に配慮されているため，障がいを持つ人も持たない人も参加しやすい競技である[6]．

星野氏が旭川療育園の肢体不自由児にティーボールを紹介した当初は，旭川療育園と香川県の施設間で交流試合が実施されていた．その後，二つの施設間の交流試合にとどまらず，星野仙一杯争奪西日本肢体不自由児ティーボール交歓大会へと発展していった．一著名人の慰問にとどまらず複数の施設によるティーボール交歓大会へと発展した過程において，星野氏と肢体不自由児との間でどのような交流が行われ，どのような経緯でティーボールが行われるようになったのであろうか．また，星野氏と肢体不自由児の間にどのような関係が形成されていたのであろうか．本研究では，旭川荘が発行する広報誌の記事をもとに，星野氏の肢体不自由児への態度と星野氏と肢体不自由児の関係性，さらにティーボールを通じた交流の発展過程を確認することを目的とした．

２．方法

２．１　調査の手続き

2018年4月から12月にかけて，社会福祉法人旭川荘の機関誌である旭川荘だよりの創刊号（1982年）から245号（2018年）を対象に，「星野」あるいは「ティーボール」（T ボール含む）等の語句を含む記事を収集した．記事の内容は，写真を除いて全てExcel 2016（マイクロソフト社）に入力して電子データ化し，星野氏の肢体不自由児への態度や交流を示す記事内容を抽出した．

２．２　倫理的配慮

本調査は，川崎医療福祉大学倫理委員会の承認後に実施された（承認番号：18-032）．

３．結果と考察

３．１　旭川荘だよりから抽出された記事

旭川荘だよりの創刊号（1982年）から245号（2018年）において，「星野」が含まれた記事の題目の件数は24，「ティーボール」が含まれた記事の題目の件数は11であった（表1）．記事の題目に「星野」「ティーボール」が含まれていない場合も認められたが，いずれも「星野」，あるいは「ティーボール」のどちらかの語句，またはその両語句が記事内容に含まれていた．以上の記事には，星野氏の来荘を報じる記事のほか，星野氏と肢体不自由児との交流の内容，旭川療育園と他施設との交流行事の一環としてティーボールが実施されたこと，星野仙一杯争奪西日本肢体不自由児ティーボール交歓大会に関する記事などが含まれていた．以上の記事を対象に，星野氏の旭川療育園の肢体不自由児に対する態度及び星野氏及び旭川療育園の肢体不自由児との関係性について，他の情報源からの媒体も参照しつつ探索的に分析した．さらに，星野氏が旭川療育園にティーボールを紹介するに至った過程とその後の展開について，記事内容に基づいて時系列的に整理した．

３．２　星野氏の肢体不自由児への態度

一般的には，複数の人々に対して土産物を手渡す場合，代表者が個々に配布する方法もあれば，各自に取りに来るように指示する方法もある．また，技術的な指導を行う場合，一部の者に指導を与える方法もあれば，全員を対象に注意事項を伝えるといった方法もある．状況によってそれらが適切な場合もあるが，星野氏の場合はそのどちらでもなく，肢体不自由児一人一人に対等に接していたことを示す記事が確認された．たとえば，星野氏がお土産を一人一人に手渡していたことがたびたび報じられていた[7-9]．さらに，土産を手渡す場合だけではなく，子どもたちからの質問に対して一つ一つ丁寧に答えていたことや[10]，子どもたちにティーボールを一人一人に分かりやすく指導したことが報じられていた[11]．江草安彦（当時の旭川荘理事長）は，星野氏との対談を通して，「星野さんは多くの人と『うま』があう人だし，あわせようと努力をしていたのだろう．」(p.2) と述べているように[12]，星野氏の肢体不自由児への丁寧な態度の背景には肢体不自由児の一人一人の個別性を尊重しようとしていたことがうかがえる．その星野氏の態度は，「『自分をみてほしい』という思い」[2]を持つ肢体不自由児にとって，貴重な経験となったことが予想される．

星野氏の肢体不自由児への態度は，肢体不自由児への激励内容にも表れている．星野氏は，肢体不自由児に対して「皆さん，障害に負けないで頑張って下さい．私は皆さんの元気な顔を見るため毎年，旭川荘に来ます．」(p.4) と発言[8]したほか，「いつも皆さんの笑顔を見ると元気がでます．これからも元気で前向きに明るく進んでいってください．」(p.4)

表1　『旭川荘だより』における星野仙一氏及びティーボール関連の記事題目一覧

発行年	号数	掲載頁	記事題目
1989年	31	4	星野監督来荘　サインボール二ダース寄贈
1990年	37	4	星野中日監督来荘
1994年	58	4	星野仙一氏来荘
1995年	64	3	星野仙一氏と旭川荘の子供たち
1997年	79	4	「がんばれAくん」 VOICE21―山陽放送テレビで紹介
1999年	91	6	「夢ひろば」オープン
2002年	106	4	星野仙一さんいつも夢をありがとう
2003年	112	4	星野監督と交流
	117	4	香川リハと交歓会
	118	4	こんなに多くの善意を頂戴しております
2004年	125	4	香川リハとの交歓会
2005年	126	4	星野さん夢と勇気をありがとう
2006年	133	4	星野さん，ありがとう
	134	2	「川﨑祐宣先生の魅力」 (11) ―監督とプレーヤー―
	134	4	寄付のお礼　星野仙一さんから今年もご寄付
2007年	141	4	23回目の激励訪問
2008年	150	4	星野仙一さん旭川荘激励訪問
	152	4	ティーボールと回転寿司で交流―旭川療育園―
2009年	156	4	星野仙一さん来荘
2010年	162	6	48回目の交歓会―ティーボールで交流―
	163	4	負けないという気持ちが大切―星野仙一さん26回目の来荘―
2012年	172	4	ティーボール
		8	星野監督来荘
	177	1	挫折をステップに
2013年	178	10	一球一打に歓声―星野仙一杯争奪第2回西日本肢体不自由児ティーボール交歓大会―
2014年	185	2	星野監督の「あきらめない」の教えを力に
		2	新年のご挨拶
		7	星野仙一杯ティーボール交歓大会を開催
	188	7	星野監督来荘　子どもたちと笑顔で交流
	194	8	編集後記　追記　星野監督退任に寄せて
	196	3	西日本肢体不自由児ティーボール交歓大会を開催　療育園フェニックスは3戦全勝
		3	星野前監督が旭川荘を訪問
2015年	209	3	星野さん迎えティーボール大会開催
2016年	221	8	星野さんも激励　ティーボール大会
2017年	233	2	第7回ティーボール大会　福島と熊本の選手招待　復興の励みに
2018年	235	4-5	追悼　星野仙一さん　ありがとうございました
		5	メモ　星野さんとティーボール
	245	2	星野さん追悼　ティーボール交歓大会　療育園フェニックスが優勝

注）記事題目に旭川療育園の利用者名が記載されていた場合は匿名化した．

と発言していた[13]．さらに，北京オリンピック野球日本代表監督当時の星野氏は，旭川療育園の園児から千一羽の折り鶴を受け取り野球場のベンチに飾る意向を示していた[14]．星野氏と肢体不自由児の関係性は，星野氏が肢体不自由児に対して一方的に激励する関係ではなく，星野氏と肢体不自由児の双方が激励し合う関係にあったことが考えられる．星野氏は公式戦当日の午前中という状況下でも来荘したことがあったが[15]，相互に激励し合う関係性が形成されていたからこそなのかもしれない．

３．３　旭川療育園にティーボールが導入された経緯と星野氏の交流に対する意欲

旭川療育園は，1965（昭和40）年から香川リハビリテーションセンター（旧ひかり整肢学園）との交

歓会を実施してきた[16]．当初は，ソフトボールを実施していたが障害が重くなるにつれオセロゲームやダーツを楽しむようになった[17]．一方，星野氏は旭川療育園の子どもたちがゴロ野球[†2)]で遊んでいたことを知り，1994年にティーボールを紹介し，さらに用具を寄贈した[18]．星野氏が，障がいを有する子どもたちに簡単な野球を体験してもらうことについて考えていた[9]ことがその背景にあったのであろう．1996（平成8）年には，ティーボールチーム「旭川療育園フェニックス」が結成され，同年から香川県の施設と交歓試合を実施するようになった[18]．

さらに，星野氏は「もっと多くの子どもたちにも経験してほしい」（p.4）という思いを有しており[19]，肢体不自由児の交流のさらなる拡大を望んでいた．星野氏は，肢体不自由児の練習を重ねて上達した時の笑顔，試合に負けた時の悔しがる姿と勝利したときの喜ぶ姿に魅了されていた[20]ことが背景にあったのではなかろうか．旭川荘の職員が，星野氏の意向を受けて他県の施設に声をかけたほか[19]，車いすを利用する子どもたちがボールを拾いやすくするために魚をすくう網を使用することを提案[21]するなど力を尽くしたことによって，星野仙一杯争奪西日本肢体不自由児施設ティーボール交歓大会が開催されるに至った（表2）．

ところで，一連の交流の過程で，肢体不自由児はどのようなことを学んだのであろうか．星野仙一杯争奪西日本肢体不自由児ティーボール交歓大会に臨んだ肢体不自由児の一人は，「負けた事は悔しかったけれど，ティーボールを通じてあきらめない気持ちやチームとして人を思いやる大切さを学んだ．これからの人生に活かしていきたい」（p.2）とコメントしている[22]．また，末光茂（第三代旭川荘理事長）の以下の観戦記には，星野氏との交流が肢体不自由児の意欲的かつ自主的な行動に結びついたことが如実に表れている[23]．

「『旭川療育園』のＫ君の活躍ぶりには，特別大きな拍手が送られました．レフトフライを好捕のうえ，一塁への見事な送球で一塁走者を刺し，追い上げられつつある勢いを封じました．その次の回には満塁でホームランを放ち，準優勝にも大きく寄与しています．彼の背番号は星野監督と同じ77．監督の教え『あきらめない』『勝ちにいく』そのもののプレーでした．

もうひとつ，感動した場面があります．車椅子打者の代走の小学生のか細い男の子に，お母さんがスタンドから身を乗り出して声援を送っていました．

表2　星野氏と旭川療育園との交流及びティーボールによる交流の発展

年	出来事
1984	星野氏　初の来荘
1994	星野氏　ティーボールを紹介
1996	旭川療育園フェニックスと香川リハビリテーションセンターの子どもたちによるティーボール交流試合開催（同年以降も実施）
1998	旭川療育園医療センター屋上に「夢ひろば」開設
2011	第一回星野仙一杯争奪西日本肢体不自由児施設ティーボール交歓大会（参加チーム数4）
2012	第二回星野仙一杯争奪西日本肢体不自由児施設ティーボール交歓大会（参加チーム数4）
2013	第三回星野仙一杯争奪西日本肢体不自由児施設ティーボール交歓大会（参加チーム数5）
2014	第四回星野仙一杯争奪西日本肢体不自由児施設ティーボール交歓大会（参加チーム数6）
	星野氏　旭川療育園フェニックス終身名誉監督就任
2015	第五回星野仙一杯争奪西日本肢体不自由児施設ティーボール交歓大会（参加チーム数6）
2016	第六回星野仙一杯争奪西日本肢体不自由児施設ティーボール交歓大会（参加チーム数7）
2017	第七回星野仙一杯争奪西日本肢体不自由児施設ティーボール交歓大会（参加チーム数7）
2018	第八回星野仙一杯争奪西日本肢体不自由児施設ティーボール交歓大会（参加チーム数6）

『あの子が立てるとは思っていなかったのに，今走ろうとしています』と．よく見ると走るというよりは，ゆっくりとした歩行に近い様子．しかし，全身にみなぎる走ろうとする気持ちは，遠くから見る者にも伝わってきました．スポーツの，それもチームがもつ力の大きさを見せつけられた気がします.」（p.2）

３．４　総括

星野氏と旭川療育園の肢体不自由児の間に相互に激励される関係性が形成される過程において，両者はそれぞれをどのように認知していたのであろうか．対人関係に関する知見を援用すると，次のように考えられる．対人関係においては，援助を受けた人に対して援助すべきであることと，援助を受けた人を傷つけるべきではないといった互恵性規範[24]が存在する．また，相手への敬意は相互交換的（互恵的）であることが言われている[25]．さらに，相手への愛情は互恵的な深い人間関係をもたらす[26]．これらの対人関係に関するモデルに基づいて推測すると，星野氏が旭川療育園の肢体不自由児に対して深い愛情を注いだことを受け，肢体不自由児はそれに応えるべく，折り鶴を用意するにしても一生懸命に取り組み，またティーボールに熱心に取り組んだことが考えられる．以上の取り組みは，他者への思いやりや協調性，さらに自主的な行動といった社会参加に不可欠な要素に対する一層の気づきをもたらしたことが予想される．

肢体不自由児の社会参加や自主的な行動を促進する手段のひとつに，日常生活動作（ADL）の訓練がある．肢体不自由児が ADL の訓練を継続的に受けることは，社会参加や自主的な行動の促進に寄与することが考えられる．その一方で，田中[27]は「ADL の指導はスキルの獲得に焦点があてられるため，訓練として位置づけられやすくなり介入しすぎることが多い．そのため本来のねらいである，自立的・自主的な行動に結びつかないことがある.」（pp.148-149）と述べている．さらに，岡川[28]は，幼児期から肢体不自由児施設に入所していたある脳性麻痺児が移動能力や身体処理能力の向上に限定された訓練を受けてきたため，社会参加が不十分となった例を紹介している．ただ，肢体不自由児の ADL 訓練を通じた日常動作の習得及び習熟は，肢体不自由児の生活の幅を拡大するために必要である．一方，ADL 訓練そのものではないが，肢体不自由児が星野氏との交流やティーボールへの取り組みを通じて学んだことも，肢体不自由児の可能性を拡大する上で不可欠と言えるのではなかろうか．

ところで，本研究では旭川荘だよりの記事を中心に内容を分析した．星野氏と肢体不自由児間の交流に触れた旭川荘だよりには，一般紙が触れなかった情報が含まれていたことが考えられる．その旭川荘だよりを分析対象としたことは，一定の意義があると言えよう．しかし，旭川荘だよりの記事として掲載されなかった数々の交流や肢体不自由児の心の動きについては，生前の星野氏との接点を有していた人々に対する聞き取り調査が求められる．

謝　辞

社会福祉法人旭川荘理事長の末光茂先生には，本研究の実施をお認め下さったことに加え，旭川荘だよりの閲覧にご協力を賜りましたことに対して心よりお礼申し上げます．旭川荘文書館内の資料閲覧及び複写に際しては田中重行館長，敬愛館内の資料閲覧及び複写に際しては原田保館長にご理解，ご協力を賜りました．心より，お礼申し上げます．末筆ながら，社会福祉法人旭川荘の旭川療育園の肢体不自由児と星野仙一氏との交流に尽力された全ての方々に敬意を表します．

付　記

本研究の一部は，岡山心理学会第66回大会で発表された．

注

†1）山影[29]は，精神的成長（psychological growth）を「青年が心理的に適応した状態にあるために必要な精神的発達や社会的能力をより身につけた状態に至ること」と定義した．人は青年期に限らず，各発達段階において心理的に適応した状態が存在することが考えられる．そこで，本稿では山影の定義を援用した．ただし，本稿では“psychological growth”を「精神的成長」ではなく「心理的成長」と訳出した．

†2）和と中村[30]は，「ゴロ野球は，基本的には通常の野球のルールにもとづいて行われますが，打撃や守備，走塁といった野球固有のルールを，障がいのある児童生徒一人一人の心身の状態や機能に応じた個別ルールに変換して実施するところに大きな特長があります.」（p.16）と述べている．たとえば，打撃で使用するバットの種類を変えることや，事前に申告しておけば2ストライク後に相手投手にゴロでの投球を求めることなどが認められるという．

文　　献

1）文部科学省初等中等教育局特別支援教育課：肢体不自由. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2014/06/13/1340247_09.pdf, 2013.（2019.4.25確認）
2）仁宮真紀，若林晴子，村上文子，赤澤啓史：障害をもつ思春期の子どもの「自己の受けとめ」に関する研究．旭川荘研究年報，**40**(1)，53-57，2009.
3）ベースボール・マガジン社編：日本プロ野球60年史．ベースボール・マガジン社，東京，1994.
4）旭川荘：追悼　星野仙一さんありがとうございました．旭川荘だより，(235)，4-5，2018.
5）日本ティーボール協会編：笑顔いっぱいティーボール．笑顔いっぱいティーボールの教材を作る会，東京，2009.
6）久保田浩司:バリアフリーへの挑戦17年のあゆみ―知的障害者へのソフトボールとティーボールの実践を通して―．生徒指導，**35**(8)，34-39，2005.
7）旭川荘：星野監督来荘サインボール二ダース寄贈．旭川荘だより，(31)，4，1989.
8）旭川荘：星野仙一氏来荘．旭川荘だより，(58)，4，1994.
9）旭川荘：星野仙一氏と旭川荘の子供たち．旭川荘だより，(64)，3，1995.
10）旭川荘：星野仙一さんいつも夢をありがとう．旭川荘だより，(106)，4，2002.
11）旭川荘：星野さん，ありがとう．旭川荘だより，(133)，4，2006.
12）江草安彦：川崎祐宣先生の魅力11―監督とプレーヤー―．旭川荘だより，(134)，2，2006.
13）旭川荘：星野さん夢と勇気をありがとう．旭川荘だより，(126)，4，2005.
14）旭川荘：23回目の激励訪問．旭川荘だより，(141)，4，2007.
15）旭川荘：星野中日監督来荘．旭川荘だより，(37)，4，1990.
16）旭川荘：いのち輝く．旭川荘，岡山，2007.
17）旭川荘：香川リハとの交歓会．旭川荘だより，(117)，4，2003.
18）旭川荘：メモ　星野さんとティーボール．旭川荘だより，(235)，5，2018.
19）旭川荘：ティーボール．旭川荘だより，(172)，4，2012.
20）二宮清純：二宮清純の視点　第2回　ティーボールを通して伝えたかったこと―進化のため，勝ちにこだわる―. https://www.challengers.tv/seijun/2015/05/3818.html, 2015.（2019.2.25確認）
21）江草安彦:人間･星野仙一30人の証言その12　子供たちに「夢」持つチャンス与え続け―20年目を迎える“最上級”のボランティア―．小池一夫，川崎のぼる著，劇画　星野仙一物語　勝ちたいんや！，小池書院，東京，116，2004.
22）旭川荘：第7回ティーボール大会　福島と熊本の選手招待復興の励みに．旭川荘だより，(233)，2，2017.
23）末光茂：星野監督の「あきらめない」の教えを力に．旭川荘だより，(185)，2，2014.
24）Gouldner AW：The norm of reciprocity: A preliminary statement. *American Sociological Review*, **25**(2)，161-178，1960.
25）E. バーシェイド，EH. ウォルスター著，蜂屋良彦訳：対人的魅力の心理学．誠信書房，東京，1978.
26）AH　バス著，大渕憲一監訳：対人行動とパーソナリティ．北大路書房，京都，1991.
27）田中新正：肢体不自由児・者への心理的援助．田中新正，古賀精治編著，新訂，障害児・障害者心理学特論，放送大学教育振興会，東京，137-153，2013.
28）岡川敏郎：ADL と QOL について．篠田達明監修，沖高司，岡川敏郎，土橋圭子編，肢体不自由児の医療・療育・教育．改訂3版，金芳堂，京都，113-115，2015.
29）山影有利佐：青年期の成長契機場面と感情，成長過程行動に関する検討―愛着スタイルに着目して―．青年心理学研究，**22**，17-32，2010.
30）和史朗，中村望央：肢体不自由特別支援学校における「ゴロ野球」の取り組み．はげみ，(376)，15-20，2017.

（令和元年5月30日受理）

Interactions between Senichi Hoshino, Former Japanese Professional Baseball Player and Manager, and Children with Physical Disabilities: His Attitudes toward Children with Physical Disabilities and His Willingness to Interact with Them

Kenji TAKAO, Manabu MIZUKO, Arata SASAKI and Takeshi YAMAMURA

（Accepted May 30, 2019）

Key words : Senichi Hoshino, children who has physical disabilities, teeball, interaction

Abstract

This study qualitatively analyzed attitudes toward children with physical disabilities on the part of the former Japanese professional baseball player and manager Senichi Hoshino (1947–2018) and his willingness to interact with them. The analysis was conducted to articles containing the name "Hoshino" and words such as "teeball". The articles were extracted a public relations magazine published by Asahigawaso. It was found that a mutually encouraging relationship existed between Hoshino and children with physical disabilities. Furthermore, it was revealed that children with disabilities were able to learn more about compassion and cooperativeness among people by playing teeball, as led by Hoshino. This suggests that children with physical disabilities gained access to social participation while also being able to voluntarily face challenges, thanks to Hoshino.

Correspondence to : Kenji TAKAO

Department of Clinical Psychology
Faculty of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
E-mail：takao@mw.kawasaki-m.ac.jp
（Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.29, No.1, 2019 231－237）